

Mr. Bassman (ベースマン列伝) vol.3

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変…。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥くとももの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えらるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Curtis Counce【カーティス・カウンス】



Photo by Ace Records:『Exploring The Future』(CDBOP 007)

Profile

1926年1月23日、ミズーリ州カンサス・シティ生まれ。本名はカーティス・リー・カウンス。プロになる前は、ベース以外にヴァイオリンとチューバを習得。16歳の時に、オマハで"Nat Towles' Territory Band"に雇われたのを機に、地元カンサス・シティを離れる。その後、3年間エドガー・ヘイズと活動。45年にロサンゼルスに移り、「クラブ・アラバマ」でジョニー・オーティスとの仕事を得る。その後、初レコーディングでレスター・ヤングと共演。40年代のウエスト・コースト・ジャズ・シーンにおいて、多くのセッションで活躍した最初のアフリカン・アメリカン・ベーシストとなる。50年代半ばまでは、ショーティ・ロジャースのグループやスタン・ケントン楽団で活動する他、サイドマンとしてシェリー・マン、テディ・チャールズ、クリフォード・ブラウン等のレコーディングにも参加。1956年に、スタン・ケントン楽団のヨーロッパ・ツアーから帰国後、ハロルド・ランド (ts)、ジャック・シェルダン (tp)、カール・パーキンス (p)、フランク・バトラー (ds) と自己のグループ "The Curtis Counce Group" を結成 (58年のカール・パーキンスの交通事故死により解散)。その後も、自己のグループで活動する傍ら、ジェラルド・ウィルソン、ジャック・シェルダン、ハロルド・ランド等と共演。また、アート・ベッバーやチット・ペイカー等多くのレコーディングにも名を連ねた。リーダー作を5枚残し、1963年7月31日、心臓発作のためロサンゼルスで急死。享年37歳。

L・ヴィネガーに次ぐウエスト・コースト・ジャズの売れっ子ベースマン

《見るからにファンキー！》

お世辞にも男前とは言えないが、ラフなシャツにハンチングをかぶり、くわえタバコでチューニングを確かめる姿が印象的なリーダー作『Sonority』(Contemporary 1959)のジャケットや、右頁で紹介している『Exploring The Future』(CDBOP 007)でのお茶目なままだまおけながら闊歩する感じ。下町の兄ちゃん風の不良系を感じさせるベース・ラインを聴かせてくれた。『Get More Bounce With Curtis Counce』(Contemporary 1957)のジャケットでは、金髪美女の色っぽい写真を使うなど、クールなイメージで売っていたウエスト・コースト・ジャズ・シーンにおいて、粋な遊び心も持ち合わせていた愉快的な男だったに違いない。

勿論、そのベース・プレイもファンキーそのもの！ 決して派手なソロを弾きまくるタイプでない所は、リロイ・ヴィネガーに通じるものがあるが、そのウォーキング・ベースの印象は、リロイが力強く真っ直ぐ歩くとすると、カーティスはポケットに手をつっ込んだままおどけながら闊歩する感じ。下町の兄ちゃん風の不良系を感じさせるベース・ラインを聴かせてくれた。

ウエスト・コースト・ジャズ全盛期の50年代は、黒人ではリロイ・ヴィネガーとカーティス・カウンス、白人ではレッド・ミツチェル、この3人が売れっ子ベースマンだった。技術でなく個性が光った時代～それが最もジャズらしいのかもしれない…。

《カーティス・カウンスと映画》

映画の都ハリウッドがあったせいか、ウエスト・コーストのジャズマン達は、映画やテレビに出る機会も多かったようだ。カーティス・カウンスも歴史的な名画に顔を出している。マックス・ローチ等と出演した『CARMEN JONES』(1954)。“ブルースの父”、W・C・ハンディの伝記映画で、ナット・キング・コールやエラ・フィッツジェラルドをはじめ、著名ジャズマン等と出演した『ST. LOUIS BLUES』(1958)。そして、レッド・ニコルソンをモデルにした映画で、サッチモやシェリー・マン等と出演した『THE FIVE PENNIES』(1959)など。

《若くして逝ったベースマン》

心臓発作のため、37歳という若さで亡くなったカーティス・カウンス。30代以下でこの世を去ったベースマンは意外に多い。ジミー・ブラントン(享年21歳と23歳という節がある)をはじめ、スコット・ラファロ(享年25歳)、ダグ・ワトキンス(享年27歳)、ポール・チェンバー(享年33歳)、ジャコ・パストリアス(享年35歳)、ジョージ・タッカー(享年37歳)などだ。事故死、病死、ドラッグやアルコールに関わる死など死因は様々だが、彼等の偉業はジャズの宝であり、その業績を次世代に伝えていくのが、我々の使命だ。

CC's Leader Album

名グループを率い、計5枚のリーダー作を残したカーティス。機会があればここで紹介できなかった2作品『Get More Bounce With Curtis Counce』『Sonority』も聴いてみて欲しい。

カーティス・カウンス・グループの記念すべき船出となった名盤



Landslide The Curtis Counce Group, Vol.1 (Contemporary S7526)

Curtis Counce (b), Jack Sheldon (tp), Harold Land (ts), Carl Perkins (p), Frank Butler (ds)

1. Landslide 2. Time After Time 3. Sonar 4. Mia
5. Sarah 6. A Fifth For Frank

名ピアニスト、カール・パーキンスに捧げられた追悼アルバム



Carl's Blues The Curtis Counce Group (Contemporary S7574)

Curtis Counce (b), Harold Land (ts), Jack Sheldon, Gerald Wilson (tp), Carl Perkins (p), Frank Butler (ds)

1. Pink Lady 2. I Can't Get Started 3. Nica's Dream 4. Love Walked In 5. Larue 6. The Butler Did It 7. Carl's Blues

このジャケットをパロディと見るかファンキーと見るかはあなた次第!



Exploring The Future The Curtis Counce Quintet Ace Records: CDBOP 007

Curtis Counce (b), Harold Land (ts), Rolf Ericson (tp), Elmo Hope (p), Frank Butler (ds)

1. So Nice 2. Angel Eyes 3. Into The Orbit 4. Move 5. Race For Space 6. Someone To Watch Over Me 7. Exploring The Future 8. The Countdown 9. Foreplay 10. Move 11. The Countdown

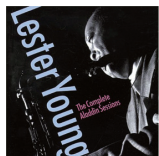
1956年10月に録音されたカーティスの1stリーダー作であり、自身の名を付けた伝説のグループの第1弾! H・ランド作のイカしたタイトル・ナンバー「Landslide」で幕をあける。このグループの良さは5人のパランスであり、リーダーのカーティスが無闇やたらに出しゃばらず、バンド全体のサウンドを統率するリーダー役に徹している所。そして、C・パーキンスのピアノが最高! そのカール作の「Mia」がこれまたブルーजी & ファンキーでカッコ良く、グループの顔であるH・ランドとJ・シムルダンのソロも光り輝く。ドラムとF・バトラーをフューチャーした「A Fifth For Frank」がラストを飾るが、リーダーである己のペースでなく、ドラムに華を持たせる心意気も憎い!

ハイライトはこのアルバムのレコーディング中に書き上げたカール・パーキンス作曲の「Carl's Blues」。死の僅か2ヶ月前に録音されたこの曲が、カールの最後の作品となってしまう。1957年4月と8月、58年1月の3回に分けて録音されたこの作品は、曲の良さが売りの曲でもある。J・シムルダンの「Pink Lady」では、カーティスのファンキーなベース・ライン、カールのブルージーなピアノも堪能できる。H・ランドをフューチャーしたバラッド「I Can't Get Started」、ブラウニーの名曲「Larue」も洗い。どこでもドラムのF・バトラーのソロをフューチャーした「The Butler Did It」を取り上げるなど、良きリーダー振りを発揮。どこまでもグループ思いの粋な男だ。

1958年に録音された作品だが、その年の3月にカール・パーキンスが自動車事故で亡くなった。その為に「カーティス・カウンス・グループ」を解散して、新たに結成した「カーティス・カウンス・クインテット」名義による本作。カールの死への悲しみを吹き飛ばすか如き斬新なジャケットが最高! サウンドも全体的にパワフルかつスピード感が溢れ、曲もカッコいい。オープニングの「So Nice」からバンドのエネルギーが迸る。カールの後姿の形でピアノを弾くE・ホープも4曲のオリジナルを提供し奮闘。「Race For Space」で聴けるカーティス独特のウォーキング、「Someone To Watch Over Me」のソロも味わい深い。奇抜だけど最高! ジャズの未来へ向けた熱いメッセージだ!!

CC's Support Album

クリフォード・ブラウン、チェット・ベイカー、アート・ベッパ等からの1stコル。ウエスト・コーストでファンキーなベースマンが必要なら、カーティスに声を掛ければ間違いないかった!



The Complete Aladdin Sessions Lester Young (Definitive Records: DR2CD-11139)

1942~47年にアラジンで吹き込まれたレスター・ヤングのセッション完全版2枚組。カーティスはレッド・カレンダー、カリー・ラッセル等とベースに名を連ねている。ナット・キング・コールもピアノで参加。



The West Coast Sound Shelly Manne & His Men (ビクター・エンタテインメント: VICJ-2021)

ウエスト・コーストの名ドラマー、シェリー・マン率いる西海岸の精鋭たちのセッションを収めたアルバム。カーティスとシェリー・マンが生み出す強力なリズムは、必聴の価値あり! 53、55年録音。



Best Coast Jazz +1 Clifford Brown All Stars (ユニバーサル: UCCM-9081)

「コ罗纳ード」「ユー・ゴー・トゥ・マイ・ヘッド」「コ罗纳ード(リハーサル)」の3曲収録。ブラウニー、M・ローチら東海岸勢がLAで繰り広げた自然のセッション。カーティスの熟演も光る。1954年録音。



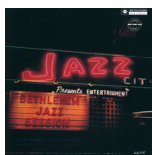
Picture Of Heath Chet Baker / Art Pepper (東芝EMI: TOCJ-9332)

「前髪はセクシーな美女のジャケットが印象的な『Playboys』というタイトルでリリースされていた作品。カーティスと共にパーキンス (p) も参加。チェットとアートのクールな音色が最高。1956年録音。



Herb Geller Plays Herb Geller (ユニバーサル: UCCM-9068)

ウエスト・コーストでアート・ベッパと並ぶ人気を誇ったアルトの名手ハーブ・ゲラーの1人作。奥さんのロレイン・ゲラー (p) も参加。ベースはカーティスとし、ヴィネガー2人が分担。1954~55年録音。



Jazz City Presents Bethlehem Jazz Session (東芝EMI: TOCJ-62053)

LAにあったジャズ・クラブ「ジャズ・シティ」閉鎖前のラヴ。3組のグループの演奏を各1曲ずつ収録。カーティスは、ハービー・ハーバー率いるグループに参加し、「レディ・ビー・クッド」を熟演!